今月の谷口雅春先生のお言葉

愛によって自己を捧げる尊い生き方

高き理想に殉じた特攻隊の青年

すべての人の運命は自己が内心に深く希ったものの実現でありますが、輝く悲惨な死を遂げた殉教者の運命も亦自己選択されたものであります。色々の霊界通信や教えに殉じた人々の業績を辿って見ますと、殉教者達は、殉教の苦痛を耐え忍ぶと云う尊き荘厳な目的の為に、地上に生れ来った所のいと高き優れたる魂であるのであります。彼等は或る理想を描く、そしてその理想に殉ずると云う荘厳なる行事に依って、一躍跳入して霊の世界に於ける最後の段階に達せんが為に暫く此世に生れ来った魂であります。私は斯う云う人達を戦争中、多くの特攻隊の青年に見たのであります。（中略）彼ら青年は、或る理想を描いて、その理想を肉体的自我よりも高きものとしてそれに殉じたのでありました。彼等に於いては肉体的自我の死を通して唯一つ魂の理想とするところのものが完成せられるのであって、戦争は逆縁ながら、彼らが魂を浄化し、絶ち難き肉体的欲望や家族に対する愛着を絶ち切り、それによって最後の目的としているより大きな目的なる、新しき生命――不滅の理念――と一体なる新しき生命を見出そうとしたのであります。

彼らは形の世界に於いて、自己の欲する全てのものを失う。否、単なる形の世界だけではない。愛情の世界に於いてさえも、理性の世界に於いてさえも、将又意志の世界に於いてさえも、彼等は、すべての現世的な一切のものを失う。併しそれにも拘らず「生命を捨てんと欲するものは生命を得」と云うイエスの聖言の如く、彼らは神の国に於いて永遠なる聖所に高く揚りたる生命を見出すのであります。その永遠なる聖所に於ける生命は地上の如何なる価値よりも、尚一層高く遙かに貴き価値を有するのであります。

（新装新版『真理』第4巻322～323頁）

なぜ自己献身が必要であるのか

ある人は言うでありましょう。何故自己献身が必要なのであろうか、何故殉教精神が必要なのであろうか。何故正しき者に苦しみが必要であろうかと。その答えは譬喩的に言えばこうである。高き者が低きものを上げる為に踏み込まなかったならば、相手を高きに上げることは出来ないのであると。高きもののうち最も高きものは愛であります。そして其の愛なるものは、それ自身を他の為に与えんと欲するのであります。これが最高の愛、自己献身の真理であります。誠にも愛は、それがそのように為されなかったならば満足することが出来ないのであります。愛はみずからを与え切らない限り幸福感を得ることが出来ないのであります。

（新装新版『真理』第4巻330～331頁）

愛を捧げ尽くすことの尊さ

実に「愛」は人々に殉教を強いるのであります。否、愛は殉教そのものであります。愛深き母は、病める子の褥の側に夜を徹して看護します。時にはそれが毎晩続いても彼女はそれに就いて何の不平も考えない。血を喀きながら、自分の身体が何時斃れるかも知れないのに、神の福音を宣べつたえる人もあります。其処には、過去の

時代に於いて総ての殉教者を鼓舞した精神と同じ聖とき「愛」の精神を示現しつつあるのであります。如何なる真の社会改善も、真の慈善事業も、若しその為に自己の力と、財と、健康と、更に進んでは自己の生命そのものさえも捧げ尽した献身の生活に依らなければ完全には達成出来ないのであります。（中略）何時の時代にも、何処の世界にも、愛のために、主義のために、彼自身の肉体と生命とを与えて与えて、喜んで現世的な総てのものを失った所の、貴き魂があることを見出すのであります。

（新装新版『真理』第4巻332～333頁）

神に対して自己を捧げることが幸福につながる

最後に指摘して置きたいのは、自我放棄の道は決して困難の道ではないと云うことであります。「自分を捨てる」とか、「自分を殺す」とかの道は難しいように見えるとは言え、唯それは最初そう見えるだけであって、単にそれは外見に過ぎないのであります。神の目的と意志とに従って素直にその導きに従って行くならば、喜びと、平和と、幸福とがおのずからあなたの生活に実現するのであります。神に従うことのみが吾々に自由を与える唯一の道なのであります。あなたはあなたの自我と、あなた自身の好む所を神に対して放棄することに依って、決して何物をも失うものではないのであります。神は無限でありますから、神に対して吾々の有ちものを放棄するとき吾々が放棄した所のものは百倍千倍万倍になって吾々に復って来るのであります。（中略）若し吾々が吾々を内部から導いて下さる神にまかせ、吾々の、自我に属する物ではなくして吾々の実相に属するところの総てのものを引出して来るならば、吾々は何一つ失うことなく、何一つ奪われないことを見出すのであります。自我に属する一切のものを捨てよ。そして実相に属するもののみを求めよ、これが幸福を得る秘訣であります。

（新装新版『真理』第4巻337～339頁）